

中国・侗(トン)族の風雨橋について*

A Study on “Wind and rain bridges” built by the Dong nation in China

Matsumura Hiroshi
松村 博**

By Hiroshi MATSUMURA

概要

中国西南部の山岳地域に居住する少数民族の侗(トン)族の集落には、「風雨橋」と称される立派な屋根をもつ橋が数多く架けられている。これらの橋は、集落への通路、玄関口としての役割はもちろんのこと、芸術的価値を持ち、集落のシンボルともなり、民族の誇りにもなっている。また、橋は人々の信仰の場ともなっており、その建設に参加することが、現世および、来世の利益の恩恵を授かるものとされており、村人はこぞって参加する。そのような風雨橋の調査を行って、その構造的特徴を明らかにするとともにその意義、効用について考察した。多くの課題を残してはいるが、その解明の方向性は示すことができたと考えている。

1. 風雨橋

中国西南部の山岳地域に侗(トン)族という少数民族の居住地域がある。その地域の集落には、立派な屋根の付いた「風雨橋」という橋と華麗な多層式の屋根を持つ「鼓楼」という塔が建てられていることで有名である。

風雨橋については過去に、武部健一氏が著書¹⁾の中で程陽(永濟)橋を紹介している他は詳しい記録や報告はなかったが、出田肇氏がこの地域を含め、中国の木造屋根付橋の調査をされ、侗(トン)族の風雨橋についても詳細な写真等で紹介している²⁾。これは本格的な調査のさきがけとなるものである。また、近年、兼重努氏によって民俗学的な観点から風雨橋の建設の本質に迫ろうとする調査、研究が進められている(文献欄参照)。

筆者らは出田氏の報告を参考にして、広西チワン族自治区に属する三江トン族自治県にある風雨橋の調査を2005年8月におこなった³⁾。本稿では、それらのデータを基にして風雨橋の構造的特徴とその意義や効用についての考察をおこなう。

「風雨橋」とは、一般的にはトン族が建設した豪華な屋根が付けられた橋のことを指すが、この地域には比較的簡素な屋根を持つ橋も多くある。また、装飾的な屋根の付けられた橋は、出田氏の報告にあるように、福建省や浙江省など他の地域にもある。とすると、「風雨橋」の定義をどうするかが課題となる。

「風雨橋」という名称は、その目的である「避風遮雨」

から生まれたとか、風水の考えから全てのことが順調にいくという意味の「風調雨順」から生まれたとされるが、「風雨橋」という言葉自体が比較的最近に作られたとされる³⁾⁴⁾。これについても検討する必要がある。

2. 調査範囲と調査対象の橋

侗族は、自らはカム或いはチャムと称し、人口は約296万人(2000年調査)で、中国西南部広西チワン族自治区から貴州省、湖南省などにかけての広い地域に居住している。9割が農民で、谷あいに農地を開き、侗寨(トンサイ)と呼ばれる村をつくり、山の恵みも利用しながら生活を営んでいる。彼らが架けた立派な屋根をもつ風雨橋は、また「花橋」とも呼ばれる。これは若い男女の語らいの場という粋な意味も含まれている。

集落の中の溪流を越える、長さ10mほどの小規模なものが多いが、集落の入口にあたる場所に渡した、長さ40mを越え、80mにも達するような橋まで、さまざまな規模のものがある。三江県の中だけでも少なくとも100橋を越える風雨橋があるとされる。

主要な風雨橋は、主に3つの谷に沿って分布している集落周辺にあり、それらは東から林溪郷、八江郷、独峒郷という行政区に分かれている(図—1)。そして、今回調査できた橋は表—1のとおりである。以下で、その主な橋の特徴を見ていくことにする。

橋の構造は大まかには、石積の下部工の上に上部工が乗るが、2~3段の刳木で支えられた主桁が屋形部を支える。屋形部は橋脚、橋台の上には多層の屋根をもつ「亭」部と、それをつなぐ「廊」部からなる。

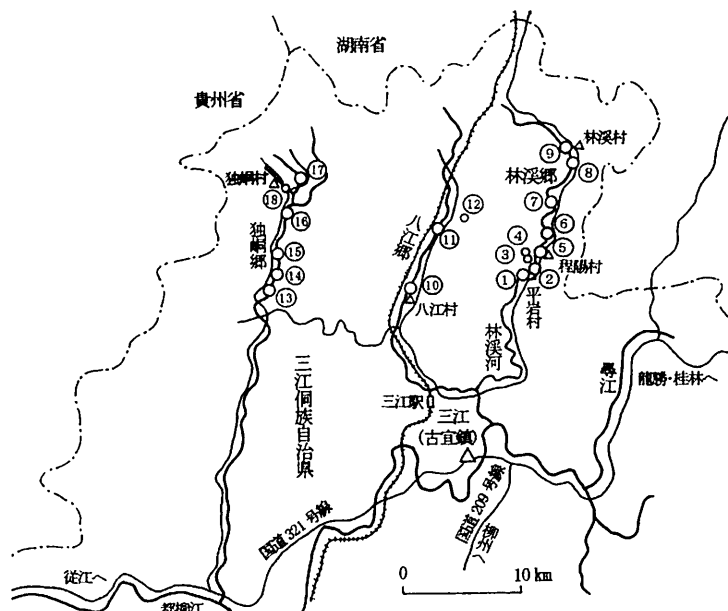
*keyword: 風雨橋、侗(トン)族、風水橋、程陽橋

**正会員 (株)ニュージェック

(〒531-0074 大阪市北区本庄東二丁目3-20)

表—1 三江侗族自治县内风雨桥(2005年8月調査分):橋長、幅等は文献2)、()内は5)を参照(作成:松村)

番号	郷名	橋名	架橋、修復年	橋長	径間	幅	その他
①	林溪郷	程陽(永濟)橋	1912～1924年、1983年再建	77.8m (77.8m)	4	3.75m (3.75m)	全国重点保護単位 神龕あり
②		合龍橋(平岩橋)	1920年、1937年流失、 1940年再建	52.9m	3	3.4m	神龕あり、 かつて関帝像など
③		万寿橋	不明、1996年再建	14m	2	4m	本体はRC
④		頻安橋(岩寨橋)	清末、1949年、1984年再建	17.8m(18m)	1	3m(2.8m)	
⑤		普濟橋(回龍橋)	清末、1940年再建、 1989年再建移転	47.7m	3	4.8m	関帝像
⑥		冠洞橋		(60m)	5	(2.5m)	祖母神、土地神像など
⑦		無名			4	2m弱	亭部なし
⑧		亮寨橋(平治橋)	民国代、1937年流失、再建	49.6m(45m)	2	4.3m(3.5m)	重点文物保護単位 かつて関帝像
⑨		安濟橋			2		かなり痛みが目立つ
⑩	八江郷	八江橋	1979年、1996年移転	41.4m(42m)	3	3.15m(2.9m)	浩然正氣などの額
⑪		八斗橋			2		雷神?(風調雨順)
⑫		関帝橋	1869年創架、1874年修復、 1985年再建	27.2m	1	3.7m	本体はRCアーチ
⑬	独峒郷	翠福橋	清光緒期、1988年	66m	3	3.7m	瑞祥彩色画
⑭		賜福橋	清代、1951再建	66m	4	4m	関帝廟
⑮		培風橋	1875年、不明	65m	3	3.8m	
⑯		巴閉橋	1910年、不明	50m(50m)	2	人道3.1m(3.9m) 畜道1.4m(1.8m)	人畜道分離、小舞台
⑰		盤貴橋	清代、1950年頃	43m	2	4.1m	
⑱		独峒橋	1882年、1970年	13.1m	1		2005年時焼失



図—1 三江侗族自治县内风雨橋位置図(作成:松村)

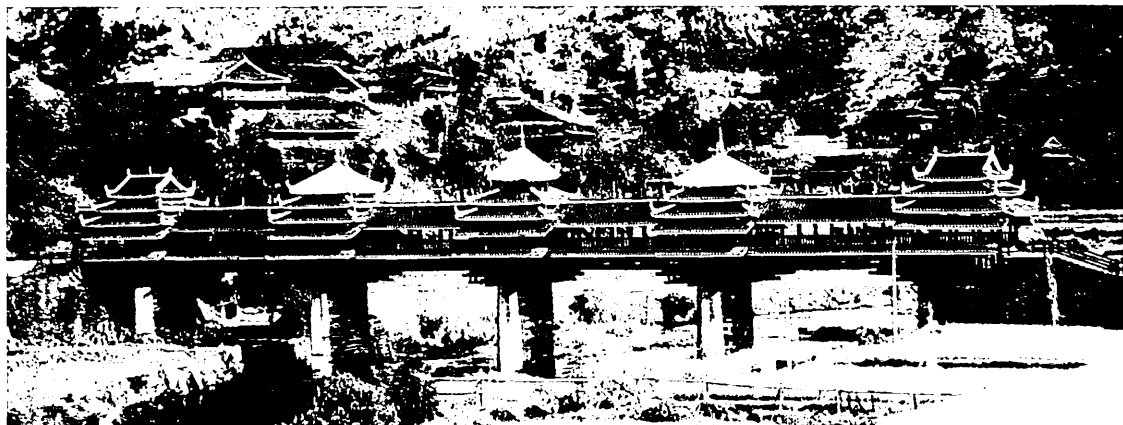


写真-1 程陽橋全景(撮影:松村,2005.8)

3. 各橋の特徴

(1) 林溪郷の橋

a) 程陽橋

三江県内の橋の中で規模、デザインから見て、最も優れた橋は、林溪郷程陽、平岩村の近くにある程陽橋(永濟橋)(写真-1)である。橋長は約78m、4径間からなり、橋脚、橋台の上に5つの橋亭がつくられ、その間は1層屋根の橋廊で結ばれている。5つの亭のデザインは異なっていて、中央のものは3層の屋根が重ねられ、頂部には六注(六角錐形)の屋根がそびえている。その頂までの高さは橋面から7mを越える。その両側の亭の頂部は寄棟型(四角錐形)になっており(図-2参照)、両端の2つは人母屋型である。

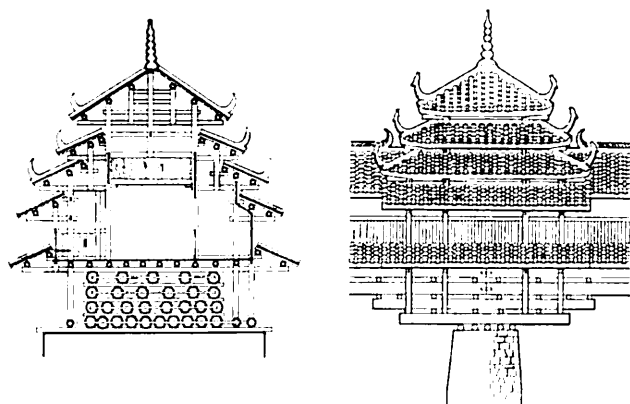


図-2 程陽橋側橋脚上橋亭の断面図(左)、側面図(右)
[文献5)より]

重い屋形部を支える主桁には、径40cmほどの丸太が上段に5本、下段に6本配置されている。橋脚部、橋台部ともに主桁を支える2段の刳木が入れている。上段の刳木は8本からなり、4mほどの刳ね出しがあり、下段は10本からなり、1.5mほど刳ね出している。それぞれの橋台上の橋亭は刳木に対するカウンターウェイトの役割を果たしていると考えられる。

そして刳木の上にはそれぞれ数本の横梁が入れているが、主桁、刳木と横梁の間には何らかの接合部材が入れているように見えず、曲げに対してせん断力が伝達されるように工夫されているように思えない。これらの主構造を風雨から守るように横に庇が付けられている。

橋脚は切石がほぼ平行に積み上げられ、水の抵抗を軽減するように、扁平な六角形断面になっている。切石積の内側にはぐり石などが詰められているとされる。

橋の内部の幅は4mほどあり、亭部では両側に1mほど広がっている。手摺の内側に沿ってベンチが作り付けられている。亭部には神龕しんぐんが設えられている所もあり、ここには関帝などの神像が祀られていたようであるが、今は見えない。

橋亭の屋根の下には天井は張られておらず、頂部までその構造が見通せる。これらの構造の結合には金属製の

材料は一切使われていないという。

屋根には瓦が葺かれているが、板や丸太の垂木の上に直接乗せられており、土は入れられていない。平瓦と丸瓦の区別はなく、かなり反りの大きな瓦が凹凸交互に重ねられている。これは他の風雨橋はもちろん、民家の屋根も共通の方法である。屋根はかなり大きな反りが入れられ、棟の先端には大きく反った鳩尾とびのような飾りが付けられている。

程陽橋の建設は1912年にスタートして1924年に完成したとされているが、1916年に初めて架けられたとする説明もある。程陽や馬安など8つの侗寨の長老50人が発議し、お金、材料、労働などの奉仕を呼びかけて10年以上の年月をかけて完成させた。建設に当たっては三江県だけではなく、湖南省の通道県などの技術者も参加したとされる。

その後、1937年と1983年には洪水で一部が壊れたが、修復された。そして1982年には全国重点文物保护单位(国の重要文化財)に指定されている。

b) その他の橋

林溪郷にはこの他にも合龍橋、普濟橋、冠洞橋、亮寨橋などおおむね50mを越える橋がある。構造的には程陽橋とほぼ同じであるため、詳細は省き、その他の特徴的なことの記述にとどめる。

程陽橋から馬安寨を回り込んだところにある平岩村に架けられた合龍橋は長さ約53mの素朴な印象の風雨橋である。橋の上には線香の匂いがただよい、厨子の前には赤いロウソクも手向けられていた。かつては関帝像なども飾られていたが、壊されてしまったという。

普濟橋(写真-2、3)は程陽村の中心部にあり、橋の中では大勢の人が、昼下がりのひと時をのんびりと過ごしていた。暑い夏の午後には川面を吹き渡る風が何よりの贈り物である。多くは老人であったが、煙草をくゆらせたり、昼寝をしたり、カードなどに興じたり、思い思いの時間を過ごしていた。

冠洞橋(写真-4)は全長60mの長い風雨橋である。3つの楼亭があるが、中央は六注屋根で、両端は方形屋根になっている。橋脚の配置が不規則で、一部の桁がコン

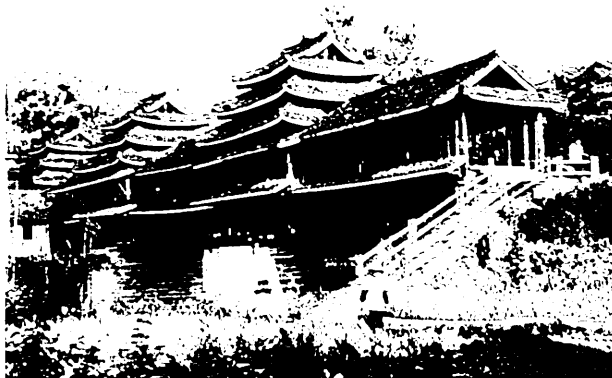


写真-2 普濟橋



写真-3 普濟橋橋上:人々が憩いのひと時を過ごす。

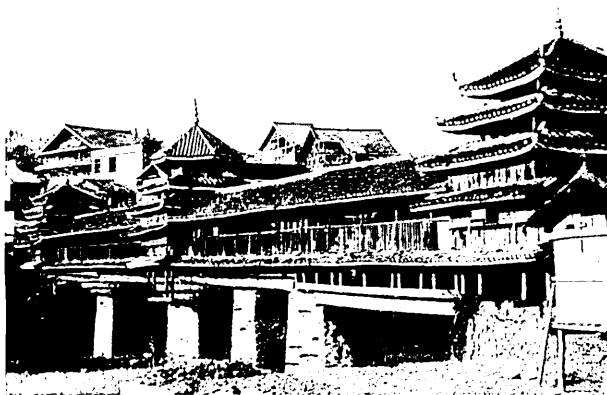


写真-4 冠洞橋全景



写真-5 冠洞橋に祀られた神像

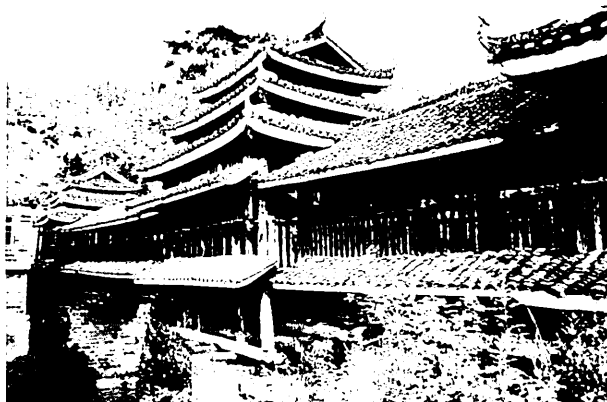


写真-6 亮寨橋

クリートになっていることから、近年に洪水の被害などを受けて急ぎで修復されたと思われる。橋亭の下には神龕があって、稚拙ながら愛嬌のある神が祀られていた(写真-5)。ろうソクと線香を手向ける人が絶えないようで、地元の信仰が生きていることが感じられた。

林溪村の亮寨橋(写真-6)は1910年代に初めて架けられたとされている。1937年の洪水で流され、再建された。全長は45m、幅員は3.5mで、上層が入母屋形になった4層屋根の3つの橋亭をもつ重厚な印象の橋である。1987年に県の重要文化財に指定されている。

(2) 独峒郷の橋

西側の谷、独峒郷では翬福橋、賜福橋、巴団橋、培風橋などの特色のある橋を見ることができる。

巴団橋(写真-7)は巴団村の深い谷を渡る橋で、まさに風景に溶け込んだ橋である。全長50mの規模を持ち、橋脚、橋台上に3つの入母屋造の橋亭がある。この橋の特徴は通路が二段に分けられていることで、低い方が幅2m弱の家畜専用の通路で、上の方が幅約4mの人専用の通路になっている(図-3、4参照)。家畜用通路の上、すなわち人用通路の横に、通路面から1mほど高くなった舞台のような空間があるが、休憩場所以外の使われ方がされていると思われる(写真-8)。



写真-7 巴団橋



写真-8 巴団橋橋上:右に舞台のような施設が見える。

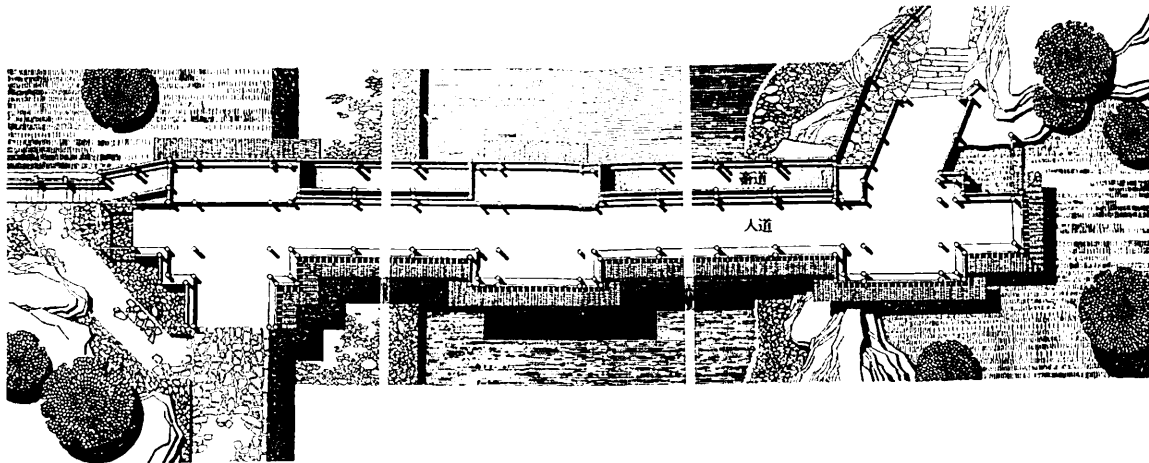


図-3 巴団橋橋面平面図[文献5)より]

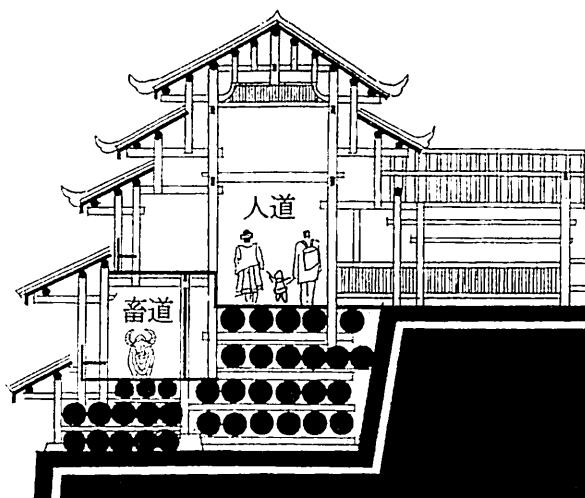


図-4 巴団橋西端断面図[文献5)より]

橋台、橋脚上の主桁構造は、程陽橋の場合と変わらないが、家畜の通路が一段低い位置に設けられているため、その部分は刎木、主桁とも一層になっている。橋亭部の屋根は、廊から続く屋根の上にいずれも3層からなり、大きさ高さともほとんど同じである。屋根はいずれも反りが大きく、4つの先端部にはつる草をモチーフにしたような飾りが付けられている。

鞏福橋(写真-9)は洗練されたデザインの風雨橋である。全長は66m、3径間で、橋脚上の樓亭は4層屋根、頂部は六注形になっている。清末に初めて架けられたようだが、現在の橋は1988年に再建されたものである。建設費は20万元かかったが、ほとんどが周辺5カ村3千人以上の住民からの寄付に拠ったようである²⁾。そして八協村の人々は労働奉仕もしたとされる。

賜福橋(平流橋)(写真-10)も清代の創架とされ、現在の橋は1947年に焼けたものを1951年に再建したものである。全長は66m、幅員は4mで、3つの入母屋造の樓亭を持つ雄大な風雨橋で、街道沿いの入口部分には側亭が設けられている。

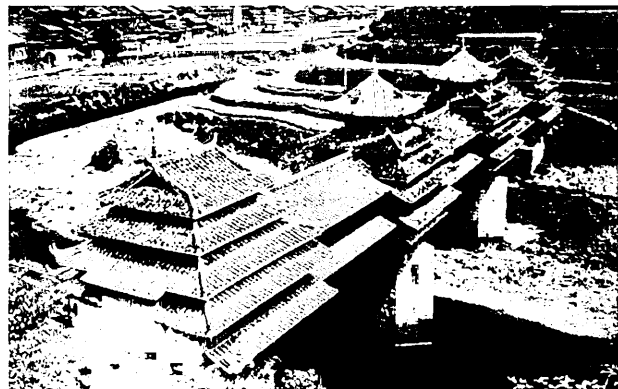


写真-9 鞏福橋

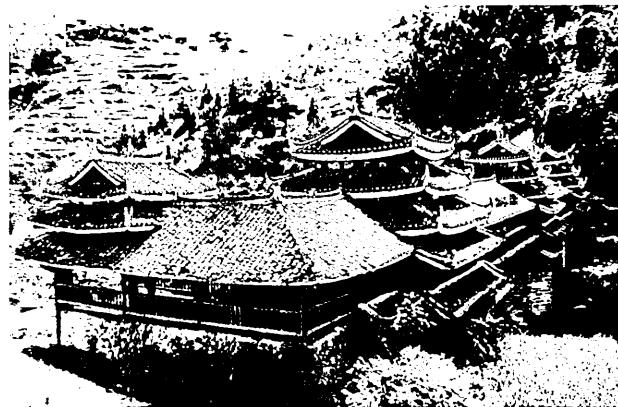


写真-10 賜福橋

培風橋の歴史も清代にさかのぼるとされる。全長 65m、幅員約 4m の規模をもち、3 径間で、4 つの樓亭があり、いずれも 4 層の入母屋造の屋根が乗せられている。

(3) 八江郷の橋

八江郷には八斗橋、八江橋などがあり、上流部には三江地域では最大規模の馬胖鼓楼があり、特徴のある地域である。

八江橋(写真-11)は 1979 年に初めて架けられた比較的新しい橋で、全長は 42m、幅員は 3m で、中央に頂部が六注型になった 6 層の屋根を持つ橋亭があり、橋の独

自性が強調されている。両端には頂部が方形になった4層の屋根を持つ橋亭が橋の安定感を高めている。さらに入口部分には他の橋に見られない入母屋造の屋根を持つ小規模な亭が配置されている。風雨橋の亭は、鼓楼とほぼ同じ構造になっているが、八江橋の橋亭は橋の上に鼓楼を建てたものと解釈してもよいであろう。

八開村の田んぼの真中に関帝橋がある。長さ27m、幅員4m弱で、切妻屋根の簡略な構造の橋である。この橋は清代に初めて屋根付の橋として架けられたが、1983年に流され、1985年に石造アーチに作り替えられた。当初は屋根がなかったが、夏に納涼の場がないので村人が相談をして、急遽屋根が付けられたとされる。



写真-11 八江橋

4. 風雨橋の特徴と意義

(1) 構造的特徴

以上の記述から、橋長40mを越える規模の大きな風雨橋の構造的な特徴を簡単にまとめておきたい。

- ・有効幅員は3~4m。
- ・スパンは15~25m。
- ・主構造は刳橋式で、径30~40cmの丸太材が用いられ、刳木は2~3段、主桁は2段で構成され、格段には5~10本が配置されている(写真-12参照)。橋台上の刳木は背後の土中に埋め込まれていない。
- ・橋脚、橋台上に3~5層の屋根をもつ橋亭が設置されているが、これらは刳木のカウンターウェイトの役割を果たしていると考えられる。

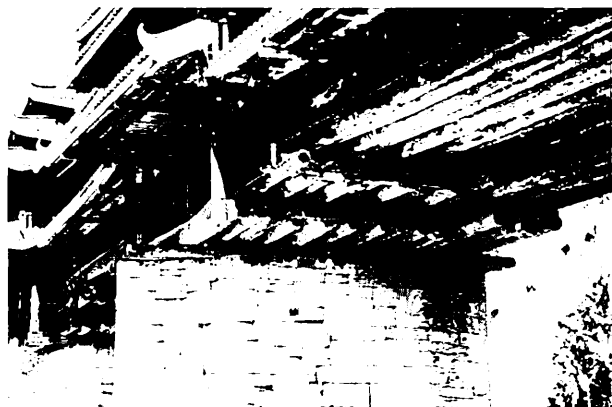


写真-12 巴関橋の主構部(2段の刳木と2段の主桁)

下部工は、切石積で丁寧に仕上げられている。川中の橋脚は壁式で、上下流を尖らせた扁平な六角形断面になっている。中にはぐり石が詰められているようである。橋台はほとんどの場合、その上に橋亭が乗るため、大きく造られている。基礎の根入れの程度はよくわからないが、あまり深くはないようである。

主構造の各層間には細い横木が入れられているが、互いの木材を組み合わせる加工はされていないようで、曲げに対してせん断力が伝達される構造にはなっていないのであろう。そして上段の主桁の上に横、縦2段の丸太を並べた床組を整え、その上に橋板が敷かれている。

高欄の手摺はかなり高く、1.5mほどはある。側面には縦格子状に角材や飾り加工された丸棒が並べられている。その前に高さ40~50cmの高さのベンチが作り付けられている。

亭や廊を支える柱は、床板の上に立てられている。柱どうしは上の方に入れられた貫材で連結されており、筋違材は見られない。亭部の構造は鼓楼の木組と同じで、柱の上に入れられた貫の上に柱をかみ合わせて次々と上方へ組み上げられている。廊部の屋根組は、両側の柱とそれに入れられた貫の上に建てられた短い柱によって支えられている。柱の上に橋軸方向の丸太の梁が乗せられるが、これは柱の頂部に直接置かれている。その上に垂木が並べられている(写真-13参照)。

瓦は垂木やそれに代わる板の上に直接乗せられており、下から瓦の裏面が見えている。瓦は平、丸の区別はなく、反りの大きな瓦が凹凸交互に葺かれている。

なお、用いられる木材は、この地に多い広葉杉がほとんどであるとされる。



写真-13 普濟橋の亭部の屋根組:天井はなく、瓦が見える

(2) 共用空間としての橋

侗族の各集落には鼓楼と呼ばれる多層の塔がある。多いものでは10層を越える屋根をもち、そのデザインは方形、六角錐型や八角錐型の宝形など多彩で、それぞれの鼓楼によってその組み合わせが異なっている。

この建物の上には大きな太鼓が置かれ、異常事態を村人に知らせる望楼の役割を持っていたとされるが、防御施設ではない。天井や床は張られておらず、中央に火床があり、主に村人の集会などに使われており、また憩いの場ともなっている。

鼓樓の前は石敷きの広い広場になっており、そこでは冠婚葬祭に村人が集い、盛大な宴が催される。演劇の舞台のような作りと装飾をもった高床の建物があり、劇が演じられるほか、多目的に利用されていると思われる。また、涼亭という旅人のための休息施設もある。このようにトン寨は豊かな共用空間をもっている。

風雨橋もトン族の人々にとっての共用空間、言い換えれば公共施設の一つであると位置付けられる。しかし、このような風雨橋が、「なぜ」このような山間部の、決して裕福とは言えない村々に造られるようになったのか、「なぜ」これほど豊かなデザインが生み出されたのかなど、多くの疑問が次々と湧いてくる。

(3) 風雨橋の意義と効用

風雨橋の効用としては、屋根があると木材の寿命が長くなり、人々を風雨から守ってくれることは当然であるが、さらに次のようにまとめられている⁵⁾。

- ・交通性：大規模な風雨橋は、街道筋から各集落の入口となるような場所に架けられ、村落間や生産活動の場への移動など、交通手段として重要な役割を果たしている。
- ・娯楽性：風雨橋は村人に交流の場を提供している。雨を避け、納涼、休息や遊びの場となっている。老若男女が集まり、昔を語り、今を論じる。また芦笙による音楽を合奏することもある。そして、村へ賓客がある時は、盛装した女性が歓迎の歌を歌い、酒をふるまって、歓迎する重要な場所でもある。
- ・標志性：村落の外観的シンボルであり、民族の誇りともなっている。鼓樓も同様の役割をもつが、鼓樓は村落内の氏族のシンボルであるのに対して、風雨橋は村落のシンボルで、宗教的色彩が強い。
- ・観賞性：風雨橋はそれ自身が鑑賞にたえるものである。橋の遠景も橋の内部の装飾も鑑賞対象となっている。また橋からの眺めも貴重である。

風雨橋はこのようにさまざまな効用があるが、これだけの説明ではそれを生み出した根本的な理由を説明したことにはならない。風雨橋はトン族の人々の宗教観や共同体観に深く根ざしていると考えられる。

5. 風雨橋の宗教性

(1) 祖先の靈魂が渡る橋

風雨橋は村人の信仰の場でもある。現在でも閩帝を始め、地元の祖先神が祀られているところが多くあるが、文化大革命の前まではもっと多くの神像などが祀られ、橋が信仰の場として息づいていた可能性が高い。

風雨橋は祖先の靈魂が通るところで、祖先神が橋を渡ってやってきて子孫に転生する、集落の子孫繁栄を約束する場であるという⁶⁾。そのために毎年「敬橋節」を催す。そして橋を架け換えるときには、お金、材料、労力を提供して、奉仕をすることになる。

(2) 風水と風雨橋

風雨橋は風水に則って架けられているとされる。風水に関して筆者には十分な知識はないが、大地が持つ自然

の「気」を人間の営為の上に活用する実践であると解釈される。

風雨橋は、かつては風水橋とも呼ばれた。そして、特に川も道もない、また村落から離れて休息の場ともなりそうにない場所に「旱橋」と呼ばれる屋根付きの橋が建てられている例があり、トン族の人たちは、風水を断つ位置に風雨橋を建設していると指摘されている⁷⁾。そして、前掲の巴団橋は飛龍に模されており、搖頭擺尾する龍の神力を村落に呼び込もうとするものであると説明されている。

実際、風雨橋の位置を確認した兼重努氏は、「林溪川では風雨橋は、そのほとんどが集落の下流側に架かっている。またそれは近隣の郷を流れる川に架かる風雨橋でも多くの場合あてはまる。」とし、橋は川にそって流れ去る財(気、風水)をせきとめ、集落内に残す役割をもつと説明している⁸⁾⁹⁾。

風水の考え方は新中国になってからは迷信として否定され、特に文化大革命中は風雨橋の一部が破壊されたこともあったという。また、橋上に祀られていた神像も多くの破棄された。風水橋という呼称も使われなくなり、風雨橋と呼ばれるようになったが、それは郭沫若が、1965年に程陽橋を称えた詩の中で「風雨橋」と詠んだことがきっかけになったとされる⁷⁾。

近年では風雨橋の文化財としての価値や観光資源としての役割が評価されて保存策がこうじられるようになっている。一方、民間信仰の場としての役割も取り戻しつつある。

(3) 共同作業としての架橋

風雨橋は普通の本橋よりは寿命は長いとはいえ、数十年に一度は大きな修復工事が必要である。それらの工事にあたっては寄付が募られ、近隣の村々からの労働奉仕も得て、実施される。完成後には寄進の事実を記した紙を焼いて天上の神に伝える儀式を行う。そして橋上にはその寄進者の名前が書かれた奉加額が掲げられる。

このように人々が進んで風雨橋の架け換えや修復に参加するのはトン族の人々の宗教観と深く結び付いていると言える。

兼重氏は、「架橋修路」のような「公益事業」は、地元の人たちにとって「いいことをする(現地ではウエスーと呼ばれる)」行為の代表的なもので、「橋や道路の修理・建設に関して、自発的に金品を捧げたり、労働を提供したりするといったかたちで、公益に資することにより、陰功(功德)を積むことである。その結果、超自然的な存在(神)が、現世の子宝や長寿、来世のよい生まれ変わりという見返りをくれるのである。」と解説している¹⁰⁾。さらに、実際の架橋が村落共同体の紐帯の中で実施されている事例を紹介している¹¹⁾。

その見返りとは仏教的な来世の考え方ではなく、かなり現世的利益に近いものであると理解される。

5. まとめ

以上の考察から、

- ・風雨橋の構造的特徴と相互の類似性を整理できた。
- ・風雨橋の意義、効用について一定の整理ができた。
- ・風雨橋のもつ宗教性にも言及できた。

ことから、風雨橋の全体像をかなりの程度捉える日処がついたと考えている。

風雨橋はトン族という民族特有の文化であり、橋だけで論じるより、鼓楼などのいわば公共的な構築物どうしの構造的、デザイン的、宗教的な関連性を明らかにしつつ、民族の深層に言及しなければ、全容を解明したとは言えないであろう。今後に残された課題は多い。

6. 今後の課題

今回言及できなかった今後の課題として、次のような点が残されている。

- ・風雨橋と鼓楼の建築の構造的な類似と相違点の解明。
- ・風雨橋に施された装飾、彫刻や絵画などの意味の解明。
- ・風雨橋に祀られた神々の性格と信仰の実態の把握。
- ・風雨橋の起源や歴史の解明。

風雨橋を創造したエネルギーは人間が根源的にもつ活動の原点に発するように感じる、奥深い課題である。

本稿で紹介した風雨橋は広西・三江県のものに限られるが、貴州省や湖南省にも多彩な風雨橋があり、それぞれに地域差があることも指摘されている¹²⁾。侗族居住地区全体では300を超える風雨橋があるとされている。ただ、今のところ湖南省通道侗族自治县などへの外国人の立ち入りは認められておらず、調査は難しい。近い将来それらの地域の開放が望まれる。

最後に日本の屋根付橋との比較研究も興味深い課題であると感じている。日本の屋根付橋の大半は社寺の参道に架けられたものであるが、一般的な通路に架けられたものが愛媛県中東部地方に集中して見ることがでる。これらの橋は村人の集まりの場や農作業時の休息の場として使われたとされ、夏の暑さをしのぐ最適の場所でもあった。また、侗寨にある涼亭という休憩施設に似た茶堂も点在している。これらは集落の共用空間としての意味を私達に問いかけていると思う。

注1：調査団は伊東孝、平野輝雄、金吉正勝、村瀬佐太美、岡崎直司、松村博の6名。

〈参考文献〉

- 1) 武部健一『中国名橋物語』pp. 253～257, 1987年10月
- 2) 出田肇『中国木造屋根付橋』1998年8月
- 3) 兼重努：エスニック・シンボルの創成—西南中国トン族の事例から—, 東南アジア研究 35巻4号, 1998年3月, 京都大学東南アジア研究センター
- 4) 李溪：風水橋, 張澤忠編『侗族風雨橋』2001年2月, 華夏文化芸術出版社
- 5) 李長杰編『桂北民間建築』p210, 1990年

6) 吳浩：橋趣, 張澤忠編『侗族風雨橋』

7) 前掲4)

8) 兼重努：人びとに吉凶禍福をもたらす水—西南中国トン族村落社会における風水知識と実践—, 秋道、小松、中村編『人と水2 水と生活』2010年2月, 勉誠出版

9) 兼重努：鼓楼・風雨橋からみたトン族の風水民族, アジア遊学 No. 47, 2003年1月

10) 兼重努：西南中国における功德の観念と積徳行, 林行夫編著『〈境域〉の実践宗教—大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』2009年2月, 京都大学学術出版会

11) 兼重努：老人たちが再生させた橋修理, 福井勝義編『講座人間と環境8 近所づきあいの風景』2000年5月 昭和堂

12) 張柏如『侗族建築芸術』2004年